本と地域の情報誌
県北どらくろあ
第125号　2026年8月1日（毎月1日発行）

芸備線ストロール⑩

備後庄原駅（びんごしょうばら）

「〝旧友〟の跨線橋（こせんきょう）と西城川での水遊び」

木次線を完走、残るは芸備線の逆方向、三次駅方面、さらには広島駅方面である。備後落合方面同様、一度も下車したことのない駅がほとんどだ。新・芸備線ストロールとして連載を開始する前に、地元の駅である備後庄原駅のことを書いておきたい。

7月19日日曜日、備後庄原駅を訪れた。35度の猛暑日で、歩いているだけで、全身から汗が噴き出してくる。2020年10月、全面的なリニューアル工事が完了、バスのロータリーを備えたモダンな駅舎に生まれ変わった。待合室だけではなく、市民の交流スペースも併設されている。ちなみに「備後」という地域名を冠したのは、山陰本線に同音異字の荘原駅がすでに存在していたからだ。



2020年10月にリニューアル工事が完了



昭和の雰囲気が色濃いホームの跨線橋

簡易委託駅で、改札の窓口で入場券を購入、料金は150円。ホームの中は、ほとんど変わっていなかった。昭和の空気がまだ色濃く残っている。意地悪な言い方をすれば、ホームまでリニューアルする予算がなかったのだろうか。

備後庄原駅の思い出は、高校を卒業するまではほとんどなかった。庄原の地を離れることが滅多になかったからだ。大学に入ってからは、帰省する度に列車を利用するようになった。

備後庄原駅―広島駅間は「急行ちどり」に乗車していたと思い込んでいたのだが、当時の時刻表を調べてみると午後の便しかない。「急行たいしゃく1号」が正解で、庄原駅8時9分発の便に乗って、広島駅10時1分到着。それから新幹線に乗り換えた。

庄原にUターン後、東京在住時代の友人から電話、「広島まで来てるんだけど、会えない？」。庄原から広島市内に出るのがいかに大変かを訥々と説明。急行も広島駅への直通便も無くなってしまった今の芸備線は、昔よりもさらに遠くなってしまった。

三次駅方面行きの1番ホームには、広島東洋カープの大きな人形が置かれている。目つきの鋭い前田智徳、ホームランを打った後？のガッツポーズ・丸佳浩、華麗なスローイングの菊池涼介、「ドラフトで大瀬良の当たりくじをひいた田村スカウト」はマニアックだ。

ホームの西側には、「赤松&天谷スーパープレー人形」がある。外野フェンスによじのぼってホームランボールを奪い取った場面が再現されている。これらのカープ人形は、庄原市内のデザイン会社IKIコーポレーションが制作したものでマツダスタジアムに展示されていたが、球団の厚意で里帰りが実現した。今年のカープは苦戦しているが、未来のために今を頑張れ！

跨線橋を登った。鉄製で錆だらけ、以前のまま、いや、さらに歳

発行：どら書房

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会